海外における市民メディア活動がもたらすもの
―コミュニティラジオの担い手の意識に着目して―

Transnationalism and the Role of Overseas Community Media: Perspectives from Broadcasters and Impacts on Ethnic Communities

深　澤　弘　樹
Hiroki FUKASAWA

要約

本論文は、メルボルンの多言語放送ラジオ局である 3ZZZ のメンバーの市民メディア活動に着目して、番組制作活動がもたらす意識の変容を探るものである。近年、グローバル化の進展により、人々が海外を拠点に生活するケースが増えている。こうした日本からの移住者や留学生らに向けて情報発信を行っているのがエスニックメディアであり、日本人コミュニティに有益な情報を提供するほか、ホスト社会との架け橋になる役割を担っている。本研究では、市民のメディア制作の意義を強調する市民メディア研究の知見を援用するとともに、母国を離れて海外で暮らす人々に特有のトランスナショナルな意識醸成の視点も加えて担い手の意識を探った。放送メンバーの聞き取り調査の結果、メディア表現を通してコミュニティへの寄与を内面化し、公共性意識が高まる側面が明らかになった。さらに、トランスナショナルな意識については、日本への思いの強化などのナショナリスティックな側面と母国を客観視、相対化する視点の獲得というアンビバレントな意識をメンバーが持つようになる点も明らかになった。

Keywords：エスニックメディア、コミュニティメディア、市民メディア、メディア・アクティビズム、トランスナショナル
ethnic media, community media, citizens' media, media activism,transnational

１．はじめに

筆者は 2019 年度に在外研究でオーストラリア[1]のメルボルンに滞在した。本研究は、そのメルボルンにある多言語放送局 3ZZZ の日本語放送のメンバーにインタビュー調査を試み、放送参加の動機や日本や日本人、日本人コミュニティへの意識の変容を探ったものである。

コロナウイルスに見舞われた 2020 年は、人々にとって情報とはライフラインであることを痛感させられ、海外で暮らす日本人にとっても同様であったはずだ。特に現地の言葉に不自由する場合は母国語での情報は命綱となり、人々は現地の情報、日本の動向などをインターネットやエスニックメディアなどを通して入手していたことであろう。

コロナ禍にあっても、本稿で研究対象とするオーストラリア最大のコミュニティラジオ局 3ZZZ は、スタジオが使えない放送の制約を強いられるなかで必死に情報を伝え続けた。このうち、日本語放送グループも３月下旬に生放送から録音放送に切り替えて番組を発信した[2]。

本論文では、この 3ZZZ 日本語放送のメンバーへの聞き取り調査をもとに、ボランティアで放送に携わる人々の意識を探る。調査では、なぜこの放送局に興味を持って活動に携わるようになったのか、放送に携わってコミュニティ放送や日本に対してどのような意識の変化があったのかを明らかにする。なお、インタビューは 2019 年 8 月から 11 月にかけて行ったもので、コロナ禍で活動を断念せざるを得なくなった方やすでに日本に帰国済みの方もいる。

ここで本稿の問題関心について触れておきたい。日本の市民メディア研究では、ケーブルテレビやコミュニティ FM での市民による表現活動の研究の蓄積がある。これらの研究では、パブリックアクセスとして市民が情報にアクセスする権利が重視され、市民の自己実現や市民自治のほか、市民主体のメディアを構築するものとしてその意義が強調されている。本研究でもその知見を継承してコミュニティの活性化に寄与する市民メディアを積極的に評価し、メンバーに放送に携わることになった動機やコミュニティへの意識について聞くことで、いかに公共的な意識が醸成されているのかを分析する。

さらには、日本を離れた海外のメディアで発信することによる意識の変容も

重要な論点である。その際に、複数の文化的アイデンティティの獲得という、トランスナショナルな視点に着目して論じる。トランスとは「越えて」という意味であり、グローバル化の進展によって、ヒト、モノ、カネの移動が活性化して流動性が高まっている。そうしたなか、新たなコミュニティのありかたが出現し、国家の枠組みを越えたアイデンティティ意識が指摘されている（毛利, 2017: 312）。だがその一方で、海外に出た人々が母国への思いを強くするという遠隔地ナショナリズムの指摘もあり、両者のせめぎ合いに注目してみていく。

海外で自国の情報を発信する営みは、母国語（日本語）を用いて思考し、話すことから、日本を再認識する機会となる。その一方で、海外の文化に触れることで日本を相対化する視点の獲得も予想される。果たして放送を行っている彼／彼女らはいかなる意識を持ち、またメディア実践がいかに意識を変容させているのであろうか。以上のような問題意識に基づき、海外で暮らしたからこそ感じる複雑な思いについて分析する。

以下、本稿では、市民メディア研究とエスニックメディア研究の架橋を目指し、「自己表現の場としてのコミュニティメディア」「送り手の視点の獲得」「トランスナショナルな視点と日本への複雑な感情」という 3 つの観点から論じていく。

２．エスニックメディアにおけるメディア表現とその意義

ここではまず、エスニックメディアとコミュティメディアを定義づけし、これらのメディアに求められる役割を確認しておく。

（1）エスニックメディア・コミュニティメディアとは何か

エスニックとは、主に人種や地縁、血縁、宗教など共通の歴史や属性等を指しており、エスニックメディアは「移民、民族、人種、言語的マイノリティ、先住民の人たちによる、その人のためのメディア」を意味する（Matsaganis, Kats & Ball-Rokeach, 2011）。その役割としてエスニック集団の文化・伝統の保存や伝承、生活情報の提供、集団内部の結束の感情維持などの集団内的機能と、ホスト社会との懸け橋となり社会的自立を促す集団間的機能、そして、災害時など

にフォーマルな情報を与え、人々が不安に陥るのを防ぐ社会安定機能が指摘され、エスニックメディアは、エスニック集団のエンパワーメントをうながしてきた（白水，1996; 2004; 2016）。

こうしたメディアはある特定のエスニックコミュニティ集団に向けて情報を提供する。この場合、情報が届く範囲となるコミュニティとは、従来は「共同生活が営まれる地域空間」であり、空間的な境界を有して、コミュニティの成員によって固有の規範やマナー、文化が共有されてきた（マッキーヴァー，1917＝1975）。ただし、バクリーは「コミュニティ」とは、「地理的な近接性にもとづくだけではなく、文化的、言語的、あるいはその他の利益・関心にもとづく場合もある」（バクリー，2010: 30）としている。つまり、母国と距離が隔たっていたとしても、コミュニティを文化的・言語的なまとまりでつながった集団ととらえるならば、コミュニティはローカルな地理的範囲を越えた文化、社会的つながりを含んでおり、グローバル化が進行しインターネットが発達した昨今は情報機器によって結ばれた関係性もまたコミュニティといえるだろう。

そして、コミュニティに向けたメディアがコミュニティメディアであり、本稿ではそのなかからコミュニティ放送としてのラジオに注目する。バクリーは、コミュニティ放送を「（あらゆる権力）から独立し、市民社会に根付いた放送メディア」であり、「非営利で、社会的利益のために運営され、コミュニティに、番組制作と運営への参加の機会を提供する」（バクリー，2010: 30）メディアと定義する。コミュニティ放送は市民社会において独立した存在であり、営利を目的とするのでなくコミュニティ全体に奉仕する役割を担う。さらには「番組制作と運営の参加の機会」が確保されていることが肝要であって、市民がメディア制作に参画して情報提供する点が特徴である。

（2）日本におけるパブリックアクセスの発展と意義

日本におけるコミュニティメディアとは、1960 年代のミニコミと呼ばれた市民による言論活動に始まり、ケーブルテレビ局での市民参加番組の隆盛を経て、近年はコミュニティ FM 局において市民による番組制作が活発化している[3]。こうしたなか、市民のメディア表現活動については、パブリックアクセスとして

公共の情報にアクセスする権利、つまり、アクセス権として語られてきた。ここで重要なのは、一般の市民が社会の不特定多数の人々に対して番組などを通してメッセージを伝えることであり、市民によるパブリックな言論空間の実現が期待される。

市民メディアが担う役割について、松本恭幸はコミュニティの活性化とコミュニティの変革に区分して論じている。具体的には、①市民メディアを活用した自己表現、②市民メディアを活用した地域活性化、③地方自治への市民参加、④市民ジャーナリズムへの市民参加である。①と②がコミュニティの活性化につながり、③と④がコミュニティの変革につながるものである（松本, 2009: 169）。

松本によると、地方自治への市民参加的要素が色濃かった農村型ケーブルテレビの自主放送時代には③の「地方自治への市民参加」や④「ジャーナリズムへの市民参加」としての役割が強く、ミニ FM を経たのちの 80 年代の草の根パソコン通信や 90 年代以降のコミュニティ FM の活性化への動きによって、①の「市民メディアを活用した自己実現」や②の「市民メディアを活用した地域活性化」へとシフトしていったという（松本，2009: 170）。

さらには、2000 年代以降のインターネットを利用したメディア表現や都市型ケーブルテレビでの市民参加チャンネルなどによって、自己表現や地域活性化の取り組みがますます活発化した。そして、インターネット新聞の登場や既存メディアの構造変化のなかで市民メディアの潮流は、③地方自治への市民参加や④のジャーナリズムへの市民参加へと再び回帰してきていると指摘する（松本，2009: 170-171）。

この類型化をエスニックメディアの表現活動に一部援用してみる。今回取り上げる 3ZZZ のような市民メディアの場合、生活情報の提供が多くジャーナリスティックな面は薄いことから、「コミュニティの変革」というよりも「コミュニティの活性化」の側面が強いと考えられる。したがって、本稿では松本の類型化のうち、①と②の市民メディアを活用した自己表現、地域活性化の観点に着目して論じることにする。前者は自己表現や関心のあるテーマを発信するものであり、後者は当該コミュニティの活性化に寄与したり、コミュニティへの愛着度を高める方向性を示す。

注目したいのは、番組に関心を持ち自己表現、自己実現のためにスタートした市民メディア活動が、番組制作を経ることで、当該コミュニティへの寄与等の公的な意味合いを帯びてくることだ。ケーブルテレビ局の市民チャンネルを分析した宮崎寿子が「私的な自己表現であれ社会的な発言であれ、公的に発信するということ、自分たちのことを他の人に知らせるということ自体が、ひとつの社会的意味を帯びているという見方も可能である」(宮崎, 1998: 222)とし、「一見私的な表現とみられる作品が、別の視点からみれば、公的な、社会的な意味を持つこともありうる」(宮崎，1998: 223）と述べるように、メンバーたちの活動の継続は「コミュニティへの意識」を高め、公的、社会的な「気づき」を促し、「コミュニティの活性化」につながる。本稿ではその点に焦点をあてる。

これらはまた、メディア・アクティビズムの萌芽としてもとらえることができる。浅岡隆裕は、地域情報化の成否を「住民が地域メディアの単なる《使い手》であるという位置に留まらずに、いかに自らが地域でのメディアを通じた自己実現や他者との連携＝『メディア・アクティビズム』を実践できるのかどうか」（浅岡，2006: 232）にかかっていると指摘する。これは、地域メディアを念頭に置いたものであるが、海外でのエスニックメディアに対しても援用が可能であろう。

浅岡はさらに、メディア・アクティビズムを活用した地域づくりでの重要な点として、固有の物語を作り出して情報発信することによって他の地域メディアと結合、参照し合い、対外的なアピールを行うとともに、そのイメージに基づいて対内的コミュニケーションを活発化させていく一連の流れを指摘する。これらは、メンバー間の内的コミュニケーションと当該コミュニティへの外に向けたコミュニケーションを同時に進行させることであり、これらによって、地域メディア上で得られる直接的な効用（例として、情報を知ることにより自己実現できたという満足感など）や、コミュニケーションによってもたらされる「われわれ意識」（一体感）が醸成され、次第に合意された「地域イメージ」が継続性に向けたモチベーションになることを指摘する (浅岡, 2006: 247-248)。

また、寺田征也はコンテンツ制作における「シロウト」さを持ち合わせた「プロ」の視点の存在を指摘している。寺田によると、コミュティ放送の担い手は

「シロウト」さに裏付けられた勤勉さをもってその役割を経験的に学んでいくのだという。これらは「シロウト」としてのコミュニケーションの深化を意味し、その地域について、「わからなさを地域の人と埋めていく作業」が重要となる（寺田，2017: 89-91）。

この指摘は、エスニックメディアにも適用可能で、担い手は放送を重ねることで次第に送り手の視点を獲得して自らが公共的な存在であることを認識し、当該コミュニティにとってより重要な情報は何かを内面化して放送に生かしていくダイナミックな動きをみせる。これらは担い手にとって内向きで自己表現、自己承認を求める初期の段階から、次第に視点が外へと向かい公共的立場を身に着ける過程といえるだろう。

（3）海外移住者が抱くトランスナショナルな意識

続いては、トランスナショナリズムの視点を補助線として、エスニックメディアの担い手の意識を考察する。「はじめに」でも指摘したとおり、海外で暮らす日本人の意識は多元的なアイデンティティを感じる側面と遠隔地ナショナリズムに代表される自国への郷愁の相矛盾する意識の獲得が指摘されている。

トランスナショナリズムでは、国境を越えた人々の結びつきや多元的なアイデンティティや帰属感が注目され、移民が日常的な社会や経済、政治的過程を通して国境を越える過程に焦点があたる（Basch *et al.*, 1994）。グローバル化が進むなか、人々は母国とホスト国両者への愛着を持つことでより母国への意識が相対化され、コスモポリタン的な意識が芽生えることもある。

この概念は、方法論的ナショナリズムの対極にあるものだ。岩渕功一（2011）は、「単一の国や文化に還元できない複雑なアイデンティティや帰属意識」に着目すべきとし、その意識の形成過程にメディアが大きな役割を果たしていると指摘する。岩渕は「本国と現在居住する社会への帰属意識の複雑な交錯」を「遠隔地多文化主義」（2016）と呼んでいる。この意識は単なる日本への郷愁というよりも、海外にいるからこそ感じる複雑な感覚である。

一方の遠隔地ナショナリズムとは、母国を離れ海外に出た人々が母国への思いを強くするものであり、ナショナリズムの脱領土化を示すものである。藤田

結子（2007）は、海外で暮らす日本人たちが自国関連のメディアに接することで、自己のアイデンティティを強く意識したり、「日本人らしさ」を再確認する傾向を確認している。

果たして、エスニックメディアの担い手はいかなる意識を持っているのであろうか。移住者は、多文化化、脱領土化が進行する現在において、海外に出たからこそ感じる母国、ホスト国両国への複雑な思い、つまり、本国と移住先に同時に帰属するハイブリッドな感覚をもっていることが予想され、本研究では、この考え方に基づいてエスニックメディアの担い手の意識を探っていく。

３．3ZZZ メンバーが語る番組への思いと意識変容

（1）インタビュー調査の概要

1）調査目的

本研究では、市民メディアやエスニックメディア研究、そして移民研究の知見を援用してコミュニティメディアの担い手にインタビュー調査を行う。本調査の目的は、日本語放送に関心を持ったきっかけや番組でのメディア実践がもたらす意識変容、日本人コミュニティや日本への思いの変化を探ることにある。以上によって、海外での市民メディア活動に携わる担い手の意識について論じていく。

2）調査対象と手法

調査対象となる 3ZZZ について説明しておく。3ZZZ は、1989 年に放送を開始しており、70 の言語で放送されている多言語放送局である（3ZZZ・HP, https://www.3zzz.com.au, 2021 年 1 月 6 日アクセス）。日本語放送は 1994 年 10 月に始まり、2019 年で 25 周年を迎えた。当初は深夜の放送であったが、現在は毎週日曜日の正午から 1 時間の放送である。2020 年 3 月下旬以降は、コロナウイルス蔓延の影響でスタジオが使用できず、一時期再放送を流し、現在は録音での放送を強いられている（2021 年 1 月現在）。

インタビュー当時のメンバーは、代表の中島みどりさんを含めて 11 人である。2021 年 1 月時点では日本在住者を含めて 8 人である。インタビュー対象者

は放送上では名前で呼ばれており、本稿ではイニシャル表記で記述する。対象者の番組経験年数とインタビュー当時の職業、身分は表 1 にまとめた。なお、記載事項はインタビュー当時のものであり、このうち、2021 年 1 月時点でメンバーとして残っているのはメルボルン在住者では代表の中島さんのほか、TS さん、MM さんである。このほか日本から U さん、N さんがリモートで出演している。

本調査の手法は一対一の面接方式である。事前に作成して送付した質問項目に沿う形で進めながら、必要に応じて質問を加える半構造化インタビュー形式を採用した。インタビューは 2019 年 8 月から 11 月にかけて行い、1 人 30 分から 3 時間程度のインタビューを試みた。インタビューは U さんのみディーキン大学で行い、それ以外のメンバーは 3ZZZ の局舎で実施した。なお、2018 年に加入し、2019 年 4 月から代表を務めている中島みどりさんにも話を聞いている。そちらの詳細は深澤（2020）を参照されたい。

表 1　インタビュー対象者概要

仮名	性別	参加年	職業・身分	主な担当	調査実施日
M 美さん	女性	2014 年	メディアコーディネーター	知っ得	2019 年 9 月 1 日
T 子さん	女性	2015 年	日本食レストラン店員	知っ得	2019 年 8 月 25 日
A さん	男性	2015 年	会社員	ろ〜かりまっか〜	2019 年 10 月 6 日
TS さん	男性	2016 年	アーティスト	わ響わ	2019 年 11 月 3 日
S さん	女性	2017 年	自然療法士	ホリスティック保健室	2019 年 8 月 4 日
U さん	男性	2018 年	大学院生、アーティスト	アートランチボックス	2019 年 11 月 21 日
MM さん	女性	2019 年	大学生	メルボルンインフォ	2019 年 11 月 17 日
N さん	女性	2019 年	留学生	メルボルンインフォ	2019 年 11 月 17 日

※　担当は 2019 年 12 月現在。2020 年 3 月下旬以降、新型コロナウイルス蔓延のため、再放送を流した時期を経て、2021 年 1 月現在では録音構成を採用している。従来のようなスタジオでのトーク形式ではなく、1 人での進行がメインとなっているため、インタビュー時点での構成とは異なっている。

（2）インタビュー調査からみるメンバーの意識

1）番組に携わるきっかけと動機：自己表現の場としてのコミュニティメディア

メンバーはどのようにしてラジオ局を知り、活動に携わるようになったのであろうか。話を聞いていくと二つのパターンがある。メンバーから声をかけられたり、知り合い・友人からの紹介で始める場合と放送を以前から知っていて興味を持って自分自身からアプローチする場合である。メンバーになった時期が古い順に経緯を紹介していく。筆者のインタビュー時点での最古参は M 美さんであった。

彼女は以前メルボルン大学で学生生活を送った時に日本語放送に携わっており、卒業後に日本で放送局に勤務後、再度、渡豪し放送に関わるようになった。M 美さんが再び番組に携わるきっかけは、昔のメンバーからお願いされたからだという。

> M 美さん：大学 1 年生の時からで、最初に関わったのは 2002 年です。卒業するまでの 3 年間関わっていました。メルボルンに戻ってきて、当時やっていた人たちがボランティアで続けていくことが難しいですと相談を受けて、毎週の放送をお手伝いするよと 2014 年の 4 月から再び関わるようになりました。

3ZZZ は現在、週に 1 回の放送であるが、スタッフの人手の問題で不定期放送だった時期があり、以前の在籍時のメンバーの SOS で M 美さんは番組に戻ることになった。M 美さんの復帰後、メンバーになったのは T 子さんである。T 子さんは福祉、医療の勉強のため来豪し、インタビュー当時は日本食レストランで働いていた。彼女の場合は日本関連のイベントに知り合いの方が出展していて、その隣に 3ZZZ のブースがあり、偶然、声をかけられたという。

> T 子さん：（イベント会場で）私が知り合いを待っていたら川柳を作ってみませんかと声をかけられました。そういうのは好きなので作ったら、その

場で録音してくれて来週の放送で流すので遊びに来ませんかと誘ってくれました。実際にスタジオ見学して雰囲気が良くメディアにも興味があったので、その後も何回か見学に行ってという感じです。

そのあとに加わったのが景観設計の会社に勤務する A さんである。A さんは自身の企画を持ち込み、地域への愛着を深めてもらうための話題を提供する「ろーかりまっかー」を月に 1 回担当することになった。A さんは日本の大学を卒業してからメルボルンに来て以降、ラジオに興味を持ち、自らコーナーを持ちたいと志願して番組に携わるようになった。その時のことをこう話している。

A さん：メルボルンのコミュニティラジオは地元の話をするのが面白いですよね。（中略）3ZZZ で 日本のラジオもやってるんだと気付いて。ただ、何回か聴いたんですがやっていない時があったんです。（中略）月に 2 回ぐらいしかやっていないんだったら私にもやらせてと。こういうことに興味があるんですけど、どうですかとその時のメンバーに数人にメールしました。

その時、すでにメンバーであった M 美さんは、その当時のことを以下のように述懐する。

M 美さん：僕、こういうことやっていて、ラジオでこういうことを話してみたいですという感じでした。企画があることはいいことですし、「12 ヶ月以上続けられますか」という話を最初にしました。趣旨を聞いた時に日本人コミュニティに役立ちそうだなと思ったのでお願いしました。

3ZZZ の構成メンバーは全員がボランティアであり、仕事を持っていたり留学生として平日は学校に通っているため、制作に割ける時間やエネルギーには限りがある。日本語放送は 25 年以上の歴史があるが、先に述べた通り、2014 年ごろはメンバーを確保して週に 1 回の放送を行うことも厳しい状況であった。

そのあとは、コーナーにゲストで来た方、その知り合いの方たちをメンバーに加えて何とかピンチを切り抜けていく。

> M 美さん：A さんのコーナーに来てくれたのが TS さんで、そこからみんなが繋がって、そういう状況ならお手伝いするよということで、メンバーが増えていきました。

M 美さんが言うように、A さんのコーナーにゲスト出演したアーティストの TS さん、T 子さんの知り合いの S さん、TS さんの友人の U さんとメンバーが徐々に増えて体制が整い、週に 1 回の放送を維持できるようになっていった。

それぞれのプロフィールと担当を簡単に紹介すると、TS さんはアーティストで「わ響（ひびく）わ」という格言を紹介するコーナーを持っていた。S さんはナチュロパスと呼ばれる自然療法の専門家で、ゲスト出演をきっかけにコーナーを持つことになった。U さんは、人形アニメーションが専門のアーティストでディーキン大学の博士課程に在籍していた。番組では、「アートランチボックス」というコーナーでアートについて語っており、アートのつながりで TS さんからの勧誘を受け 2018 年にメンバーに入っている。なお、現代表の中島みどりさんが加わったのもメンバーが充実してくるこの時期（2018 年）であった。

これまでまとめてきたように、インタビュー時点の放送メンバーは、メンバーからの声掛けや日本関連イベントでの勧誘など、日本人コミュニティ内部での知り合いネットワークがもととなっている。ただし、それがきっかけであったとしても放送を継続するためには、「何のために」発信するのかというインセンティブが必要になってくる。この点に関して、前述の TS さんから U さんにかけた言葉が興味深い。

> TS さん：みんなと繋がろうという気持ちを大事にしているので、U さんにも言いました。入る前に本気でボランティア考えてみて。一生に一度でいいからと。ちょっと人生よくなるよと話をして。僕らはアートをやっていて幸せだよね。思ったことを胸張って若い人に言ってあげるべきだと言っ

て。そこに共感してくれて、TS さんやりましょうと言ってくれました。

こうした声掛けから見えてくるのは、ラジオという媒体を使っての情報発信や自己表現が「放送がもたらすコミュニティへの寄与」への思いを喚起し、それに対する共感が、毎週の放送を支えている点である。コミュニティへの貢献の内面化は、メディア・アクティビズムを活性化させるものである。メンバーがコミュティメディアの役割をいかに認識し、番組作りに携わっていたのかについては後述することにする。

続いては、20 代の若いメンバーがどのようにして興味を持ったのかをみていきたい。日本ではテレビ、ラジオなどの伝統的メディア離れが叫ばれインターネットでの情報入手が一般化している。この後紹介する 2 人のケースもソーシャルメディアが窓口となっていた。最初は、ラジオに関心があってソーシャルメディアでアクションを起こしたことが出演につながる MM さんのケースである。彼女は、母が日本人、父がスリランカ人の二世であり、小学校まで日本で過ごし、中学、高校はマレーシア、大学からメルボルンという経歴を持っている。3ZZZ に興味を持つきっかけは日本語であった。

MM さん：日本でもマレーシアででもそうなんですが、耳から慣れる方が聞き取りやすくなってくるので、小さい時から結構ラジオを聴くのが好きだったんです。こっちに来る前に日本人の知り合いがいなくて、（中略）絶対日本語が恋しくなるなと思って軽い気持ちで日本語ラジオがないか検索したら 3ZZZ の日本語放送が出てきて、来る前からちょこちょこ聴いていました。こっちに来てからは時間がある時に聴いていました。（番組告知を）フェイスブックにアップしますよね、それにライクをしてたんですよ。そしたら代表のみどりさんから連絡が来て、いつもライクをしてくださってありがとうございます、もしよろしかったら見学にいらっしゃいませんかという話を頂いたので、なかなかない機会ですし行ってみようと思って来たのがきっかけです。

MM さんの場合は、中学から英語環境であったため、日本語に触れたいという思いから放送に関心を持ち、番組制作に携わるようになった。局が指定するトレーニングを経て、2019 年 9 月から「メルボルンインフォ」というイベント等の紹介コーナーを担当するようになった。

インタビュー時点で最も新しいメンバーで 2019 年 11 月に加入した N さんは、メルボルン大学で学ぶ留学生であった。知るきっかけはフェイスブックの投稿だった。N さんはこう話す。

> N さん：フェイスブックに「メルボルンにいる日本人集まれ」というグループがありますよね。その存在に 8 月ぐらいに気づいて。私はあまりにも日本人と会う機会がなさ過ぎて日本人の友達が 1 人もいなかったんですよ。（中略）そこでこの 3ZZZ の投稿を見つけて。同じくブリスベンに留学している友達が同じようにローカルのラジオを日本語でやっていて、それが楽しそうだったのと、私自身が昔小さい頃 1 回ぐらいアナウンサーになってみたいなと思ったことがあったので完全に興味です。この放送局を知ったのは 9 月か 10 月ぐらいです。

さらに、次のように続けた。

> N さん：自分の情報をうまく発信できないのが私は弱みなんですね。簡潔にすべてをまとめる、一言で表すのが苦手なので、そこをどうにかしたいと昔から思っていて、ラジオのような放送になってくると、時間のリミッターもありますし、見えない相手に対する表現のリミッターもあるので、リミッターがある状態で何かできるようにという思いがありました。(中略)自分の中で何かしら発信する力が伸びるんじゃないかなと思ったり。あとは単純に今まで自分がやってきたことを踏まえてメルボルンの人たちと繋がりたいし、自分が発する一言二言がメルボルンにいる人たちに何かしらの役に立てばなーと思って始めました。

筆者が話を聞いた時は彼女がメンバーになって間もない頃であったが、関わるきっかけとして、「表現する」ことへの思いと日本人コミュニティとのかかわりや貢献を口にしていた。海外で生活すると、母国を離れているだけに同胞意識が芽生えやすく、N さんの場合、慣れない環境のなかでメルボルンにいる日本人から有益な情報を得たいという思いもあったようだ。

以上ここまで、メンバーが放送に関わった動機、経緯をまとめてきた。日本の市民メディアの担い手は、中高年の比較的高学歴の男性のほか、メディアを学んでいる学生が多いとされている（平塚, 2011: 159）。オーストラリアのエスニックコミュニティメディアの場合は、日本からの留学生やワーキングホリデーを利用している若者、そして、永住者がかかわるケースが多いようだ。3ZZZ の場合はメルボルンに暮らす日本人の数が 2 万人程度と限られており、その人的資源のなかで日本人コミュニティ内の交流を基盤にメディア制作が行われている。

また、MM さんや N さんがインターネットで日本語放送の存在を知ったように、近年、インターネットが番組認知の重要なプラットフォームになっている。フェイスブック内にはメルボルン在住者のグループもいくつかあって情報発信しており、日本語放送はそれらへの投稿やフリーペーパー『Dengon Net』へのメンバー募集案内など他メディアとの連携も生かしながらスタッフの確保を図ろうとしている。こうした活動が日本人コミュニティ内での認知につながり、放送を支えているといえよう。

2）コミュニティへの寄与と気づき：送り手の視点の獲得

続いては、放送に携わることによる意識の変化を探る。この観点では、先述した自己表現への欲求や漠然としたラジオ放送への興味の段階から送り手の視点をどのように獲得し、公共的なコミュニケーションの意義に気づくようになったのかに注目する。

3ZZZ には全員がボランティアで関わっており、メディアでの経験があるのは M 美さんだけである。ただし、たとえ未経験であっても、ラジオで発言することは公共性を帯びた行為であり、メンバーは放送を重ねるにつれて、受け手

を想定してどのような情報が適切で役に立つのか考え、送り手の視点を学ぶことになる。それはラジオがもつ公共的な役割を高め、番組としての完成度を上げていくことにつながっていく。こうした「送り手の視点」の獲得と日本人コミュニティへの意識についてメンバーの声をまとめてみたい。

まず初めに、T 子さんが語る番組を進行する上での注意点である。

> T 子さん：録音を後から聴いて声のトーンが落ちていると聴いている人が楽しくないなと思うことがあったので、できるだけトーンを上げて心地よく聴いてもらいたいというのが一つです。後は、いろんな方に興味を持ってもらったり楽しんでもらったり、それが一番大事かなと思っているので、リスナーの方をいつも想像しながら話しています。

この点に関連して、放送する際にどのようなリスナーを想像しているのかを聞いてみた。

> T 子さん：最初はリスナーがどれだけいるか本当にわからなかったんです。日本から定期的にメールをいただいていたことがあって、その方であったり、私がメンバーになることで友達が聴いてくれたり、メンバーの友達が聴いてくれています。実際に声として上がってくると、日本からメルボルンの生活を想像してもらうのも楽しいのかなと思って、そういう方もリスナーとして考えているのと、後はアメリカの方からもメールを頂いたことがあります。メルボルンの外にいる方も聴いていて、本当にワールドワイドなんですね。メルボルンやメルボルンにいる人の面白さをメルボルンの人にもメルボルンの外にいる人にも紹介したいなと思っています。

コミュニティ FM は地理的に限られたエリア限定で電波を発信しているが、インターネット時代には情報は越境し、世界中どこでも聴くことが可能となっている。3ZZZ ではメルボルン在住の日本人のみならず日本や世界中のリスナーを想定して情報発信を行っている（深澤，2020 参照）。T 子さんの場合も、メ

ルボルン以外のリスナーも意識しながらマイクに向かっていた。合わせて、メルボルン在住者に対しては以下のように心がけているという。

T 子さん：（聴いているのは）長い人か、来て間もない人かどちらかだと思っていて、（メルボルンのイベント情報を伝える）メルボルンインフォでは毎年同じことを言ってしまっていいのかなと思った時がありました。なので同じ情報でも言い方を変えたりとか、自分の経験をもとに伝えたりして、新しい方にも前に聴いた方にもちょっと変化をつけて同時に楽しんでもらえたらいいなと思っています。

こうした姿勢は不特定多数のリスナーを想定したものであり、メンバーは試行錯誤しながら様々な工夫をして「伝える」術を身につけようとしていた。ではほかのメンバーはどうであろうか。U さんに番組で話をすることによってどのような思いになるのか聞いたところ、以下のような答えが返ってきた。

U さん：楽しいですね。楽しいですけど辛いですね。辛いというか放送自体は 30 分ぐらいしかないコーナーですけど、そこをどういう風に構成してどういう質問をするか。例えば、ゲストにどう伝えて、自然でかつ面白いところをくすぐれるかっていうのを考えるのは難しいですね。声しか聴こえないじゃないですかラジオって。その分難しいなという感じがありますね。

さらに、放送することによる気づきや自身にプラスの面があったかを聞くと以下のように語ってくれた。

U さん：言葉選びとか、よく考えるようになったなって思いますね。堅苦しい言葉遣いとか、カジュアルすぎる言葉遣いだったりとか、そういうのをどこに設定したらいいのかとよく考えるようになりますし、あとは内容もそうです。自分のなかでラジオのイメージがあるじゃないですか。こう

いう感じの話し方をしているなとか、こういう話をするなとか。それにだんだんなっていくんですね。全体の流れを考えてるというか、一番面白いところをメインに持ってきたいと。そういうのは勉強になりますね。

12 歳の時にマレーシアに移住し、それ以降は日本語環境におらず、放送が日本語を書く勉強にもなっているという MM さんは、普段のマイクの前での心がけをこのように話す。

MM さん:聴いてらっしゃる方は耳からで、何か見ることは出来ないので、どれだけ言葉で情景とかを伝えることができるのかっていうことですかね。わかりやすく聞き取りやすい言葉にできるかどうか。後は、文章とかも長い文章ではなく結構短めにまとめたり、聞き慣れない言葉には説明を付け足すよう心がけています。(中略) 間違った情報を伝えていけないのでちゃんとリサーチしてとにかくミスがないようにと気をつけてますね。

これらは、送り手の視点の獲得であり、放送を重ねるなかで伝えたいという表現欲求に公共性の観点が加わり、より受け手を意識した表現を心がけるようになっていく。こうした試行錯誤は、寺田が指摘するような「役割の経験的な学び」であり、「シロウト」としてのコミュニケーションの深化ともいえるであろう。さらには公共性重視の姿勢は、受け手集団である日本人コミュニティへの思いを再認識することにもつながっていく。

このように、メディアで語ることは担い手に「気づき」をもたらすものである。エスニックメディアの場合は、送り手と受け手ともに同胞としてのつながりを基盤としており、送り手が海外で暮らす日本人に有益な情報とは何かを思いめぐらすことでコミュニティへの寄与の度合いを高めていくことになる。T 子さんは、コミュニティメディアの役割を次のように説明する。

T 子さん：コミュニティラジオは地域に根ざしているものだと思います。（中略）メルボルンにいる日本人の方がここに行くと日本語を聞ける、日

本の情報を得られる、別に情報を得たくはないけれど日本語を聞くだけで安心するという方もいらっしゃると思うので、そういう意味で心の故郷みたいな役割になれば一番いいのかなと思うんです。

また、U さんは次のように表現する。

U さん：駆け込み寺じゃないですけど、コミュニティラジオなので、日本人の人達が集まってワイワイやりながら、それをラジオでやってるというのが楽しそうでいいなぁっていうイメージがあります。もっと出入りがあって、もっと楽しい雰囲気というか、人とコミュニティの間に入ったりとかコミュニティをサポートしたりとか、あんまり閉ざされていないグループになればいいなというのが一番です。例えばワーホリで来ている人とか学生で来た人たちとか、困ったらそのラジオ局に行けばみんないるらしいよ、毎週みんなそこにいるらしいよ、という感じになればいいかなって思っています。

3ZZZ の日本語プログラムでは「つなげて元気に」をスローガンに掲げ、コミュニティ内のコミュニケーションを活性化し、成員間の交流を活性化させることを意識している（深澤，2020）。メンバーにもその理念は浸透しており、先ほど紹介したメンバーのコメントがそれを物語っている。

先に述べたように、M 美さんは以前学生だった時にもこの放送に関わっており、日本の大手メディアで働いた経験を持っている。彼女はマスメディアのような大きな組織と比較して、コミュニティラジオのメリットについて、以下のように話す。

M 美さん：ワーホリで来たり、学生で来たりすると、やりたいことを見つけたりとか、やりたいことがあったとしてもそれをどう生活できる仕事に繋げていくのかとの難しいと思うんですね。そういう意味で、違う職業のいろんな人の話を聴いて何かのヒントになったらいいなとか、海外に住む

のは色々大変なことがある時に、一瞬でも日本語を聴いてほっとしてもらいたいという気持ちがあります。英語だけで生活するのもストレスで大変な部分もあると思うので、聴いてみてこんな人たちもいるんだとか何かのきっかけになったり、同じ文化を持っている人たちとつながっていけるのにちょっとでも関わっていたらいいなというのはありますね。

続けて、日本語放送の日本人コミュニティへの寄与については以下のように述べる。

M 美さん：みんながやりたいと思っていることを実現できるし、その可能性として、日本人コミュニティの方たちがこうして欲しいというのがあればいくらでもかかわっていける可能性がありますし、そういう場を持っているというのが強みだと思っています。（中略）コミュニティの聴いてくれている人も含めてコミュニティラジオが成立していると思います。大きい企業で放送している時って文字通り流しっぱなしになっちゃっていると感じますね。

これらのメンバーの発言からは日本語放送がいわばハブとして日本人コミュニティのアクターをつなぐ社会関係資本的な役割を担っていることが分かる。毎週の放送を通じ、メンバーたちは公共性を担う放送としての使命を感じるようになり、コミュニティに寄与するためには何が必要かを考えるようになるようだ。

松原明は、メディア・アクティビズムの特徴として、①当事者が発信する、②タブーや検閲がない、③さまざまな発表形態をもつ、④社会性をもつ、以上の 4 点を挙げ、そのうち①の「当事者の発信」にこそ真髄があると述べている（松原，2011: 62）。また、北郷裕美は、送り手＝受け手である市民メディアにおけるマス・メディアとのテーマ設定の違いに触れている。マス・メディアが事件を扱いスクープを狙う態度であるのに対し、市民メディアでは日常の生活レベルにある身近な生活課題がテーマとなる。この場合、「市民との協働による

メディアの公共性を確保するための議論空間を常に用意し、公開する可能性が開かれていることが重要」（北郷，2015: 107）で、当事者自身が語ることで実感が伴ったストーリー（物語）性のある語りとなるという。それは、同じ悩みを共有しているからこそ生まれる共感であり、地域の物語を語ることが大切であると指摘する（北郷，2015: 250）。海外で暮らすことは様々な困難を伴う。エスニックメディアの担い手にはそれを共有しているからこそ語れる言葉があり、聴く人の共感を得ることができる。

北郷はさらに、同時に放送局内のコミュニケーションが重要であり、第一に組織内部の公共的なコミュニケーション循環が担保されていることが必要と指摘する。これらは自分たちのコミュニケーションが公共的か否かを常に振り返るという「自己言及的」な考え方にも通じる（北郷，2015:250-251）。

こうした営みはエスニックメディアにも適用可能であり、内外のコミュニケーションの活性化が信頼されるメディアになりうるかの成功の成否を決めることになるのであろう。

3）トランスナショナルな視点と日本への複雑な感情

続いては、岩渕が「遠隔地多文化主義」を呼ぶ「本国と現在居住する社会への帰属意識の複雑な交錯」について考える。この意識は海外で暮らす日本人が感じる複雑な意識であり、岩渕はこの意識を「〈ここ〉にいながら〈あそこ〉にも同時に帰属する感覚」（岩渕，2016: 210）と表現している。

先に述べたように、海外で暮らす日本人は遠隔地ナショナリズムの考え方に代表されるように、遠く離れた海外で暮らすことによって日本への郷愁を感じる傾向があるとされるが、エスニックメディアの担い手の場合はどうなのであろうか。メンバーに話を聞くと、日本人コミュニティに向けた情報発信により、コミュニティへの親近感がわき、放送は「日本」あるいは「日本人」に対しての思いを再確認する機会になっていると語る。

例えば、12 歳から海外で暮らす MM さんは、以前よりも日本語を使う機会が増え、日本語を話すことによって「日本」を感じ、日本に対しての興味が増したという。日本語に触れる機会が増えたことを以下のように表現している。

MM さん：それはうれしいですね。英語ばっかりでもストレスになってくるので、息抜きじゃないですけど、でもそういう気持ちも少しはあります。なので原稿をすごく楽しく書かせて頂いています。

放送に携わったことにより、日本人であることを実感するか聞いたところ、以下の答えが返ってきた。

MM さん：考え方とかですかね。オーストラリアの方って結構マイペースで、時間にもルーズだったりとかちょっとのミスはあまり気にしない方が多いんですけど、日本は時間とかでも 10 分前には入ってますよね。（中略）見た目こんななんですけど、考え方は日本人的って言われることが多いので。ラジオは日本を見つめ直すいいきっかけになっていると思います。

では、他のメンバーはどうなのであろうか。T 子さんは以下のように話している。

T 子さん：もともと英語力を伸ばしたかったので日本人の方とのコミュニケーションはできたら避けたいと思っていたんですが、放送を始めてから日本人の方に興味を持ち始めました。こんなに海外に面白い人がいっぱいいるんだと日本人に対する見方が変わりました。

それと同時に、「内なる日本人」に気づく場にもなったという。

T 子さん：私は日本にいる時は日本人でありたくないというかちょっと違うなと思っていたんですが、こちらに来ると私やっぱりすごい日本人だなーってつくづく思います。オーストラリアにいるからこそもう少し自由に考えてもいいし、自分をもっと主張してもいいと思うんですが、それができなかったりするところは日本人だなぁと思います。

こうした、「日本人らしさ」の再発見とともに、日本は「居心地がよくない」という言い方もしている。

T 子さん：年に 1 回は帰るんですが、あまり居心地がいいと思えないですよね。人が多いのがまずしんどいと思うのと規則がすごくいっぱいある感じがするのと。（中略）意見が違うからといって否定するわけではなく受け入れるのはこちらのいいところであって、そういうところは日本の弱いところなのかなと思っています。多いものに従えというところがありますよね。それはちょっとしんどいんですよね。

同様に、U さんに海外生活をするようになってからの「日本への思い」の変化を聞くと、日本の特殊性に気付いたと述べた。

U さん：日本はすごい特殊だなって思うようになりました。言葉が難しいというのもあると思うんですが、日本人は日本から出なくてもいいじゃないですか、日本に住んでいると。だから日本の人ってあまり海外に出ないんじゃないかな。（中略）日本は閉ざされているイメージがありますね。（中略）日本人特有のこれっていう答えがある気がします。30 までに結婚しなきゃいけないとかそういうのが強い。そう思い込んでるというか。それは誰が決めたんだっていうことがたくさんありますね。（中略）逆に日本に対しては、ご飯が美味しいなとか好きになった部分もたくさんありますけど、それと同じくらい日本に対してちょっと引いてみる感じにはなりましたね。

こうした思いは、岩渕のいう複雑なアイデンティティといえ、オーストラリアという外国に身を置いたからこそ得られる日本へのアンビバレントな思いである。メンバーは物理的に遠く離れた日本への思いを強くしながらも、一方で、日本や日本人への否定的な見解を持つようになっていた。海外での生活は日本絶対視の考えから脱却し、グローバルな視点を身につける一面もあるようだ。

このほか、日本とマレーシアで育ち、メルボルンに来たMMさんは自らのアイデンティティへの複雑な心情を打ち明ける。彼女は、「マレーシアで生活していた時期が長すぎて、日本人的な考えもあるんですけど、ちょっとマレーシア人感があるかもしれないというか、なんか中途半端な、ちょっと日本人も入りつつ、マレーシア人も入りみたいな感じが自分でも分からなくなる時が結構あるんですよね。日本人なのか何人なのかみたいな」と話していて、自己のアイデンティティに対する揺らぐ思いを吐露した。

MMさん：故郷ってどこって聞かれると、一応生まれ育ったのは埼玉県の熊谷市なんですけど、でも帰ってもそこまで帰ってきたという感じがないというか、日本に戻っても旅行に来てるみたいな感じなので、帰ってきたと思うのはマレーシアの方かもしれないです。
筆者：今、何人ですかと聞かれるとどう答えるんですかね。
MMさん：日本人と言いたいんですけと、日本人じゃないかもしれないかなって思います。

MMさんの場合は父親が外国人であり、日本で生まれ育ち、留学で海外に来た場合と同列に論じることはできないかもしれないが、もともと持っているアイデンティティ意識がオーストラリアという出身国や育った国ではない地に身を置き、日本語で番組制作に携わることによって揺さぶりをかけられているといえるのではなかろうか。彼女は放送に関わることによって、国境、国民の枠組みを超えたアイデンティティ、つまり、トランスナショナル・アイデンティティを感じているともいえる。MMさんにとって「日本語に触れたい」との思いが放送に関わる出発点であったが、多文化社会オーストラリアにおけるメディア表現活動は自らのアイデンティティを見つめ直す契機となっていた。

以上のことから、海外での生活は、母国への愛着や帰属意識を増進させる側面と、母国を客観視し相対的に眺める視点の両方の方向性を同時に引き起こさせているといえるだろう。それらはどちらの国に優劣をつけるものではなく、岩渕がいう「帰属意識の複雑な交錯」といえるものだ。Sさんは次のように語

る。

S さん：若い時は日本のここはあそこがとかオーストラリアだったらこうなのにって言いがちじゃないですか。ただ年齢を重ねてくると、やっぱり両方の良さがありがたいなと思うようになるのでどっちもどっちかなと思います。

また、M 美さんに「日本を離れているからこその日本への思いの変化はありますか」と聞くと以下のように返ってきた。

M 美さん：ありますあります。『ここがヘンだよ日本人』ってありますよね。あれの番組で共感できる部分があって、日本人じゃない方がコメントすることに対して共感することが多くなったなという気がします。
筆者：日本もオーストラリアも好きという感覚でしょうか。
M 美さん：だいぶ（日本を）客観視してると思いますね。（中略）どっちをより好きになったとか日本が嫌いで海外に出たわけではなく、より楽しそうと思ったりその時にやりたいことに沿って行ったら今に至るという感じです。日本が息苦しくて海外に出たわけではないので、やはり来た当初からこういう面では日本の方がいいなとか日本の方が優れているなと思っていた部分って 10 何年いても変わっていなかったりします。逆に日本のこういう部分が変わっていけばより良くなるだろうなと学生になって感じたことと 30 代になって感じている事とそんなに変わっていない気がしますね 。

こうしたトランスナショナルな意識については、海外で暮らしているからこそ身につけた視点であり、コミュニティラジオでの営みとは直接関係はないであろう。ただし、コミュニティ放送局の役割を考えたときに、自国の文化を客観視し相対化する視点は多文化共生にとっては重要な視点といえる。グローバル化が進み多様性が求められる今、ナショナリズムに回収されないトランスナ

ショナルな視点がエスニックメディアには求められており、担い手もまたメディア表現活動を通してそういった視点の獲得も期待される。今後、多文化状況の進行が予想されるなか、排他的になることなく他のエスニックコミュニティとの架橋的役割を担っていくことも求められるであろう。

４．おわりに

本稿ではメルボルンのミュニティラジオ局 3ZZZ のメンバーへのインタビュー調査によって、放送に携わった動機や意識の変容に着目し、コミュニティへの意識や送り手の視点の獲得へ至るプロセスを明らかにしてきた。また、同時にトランスナショナルな視点から、送り手自身が持っている日本への複雑な思いを読み解いてきた。調査により、メンバーは、日本への愛着を強くする一方で、多文化に触れたことによる母国を客観視する視点も獲得し、受入国と送出国の狭間で揺れ動くアンビバレントな感情を抱いていることが明らかになった。

本研究を通して、従来の市民メディア研究で言及されてきた市民のパブリックアクセスの重要性を確認できたと同時に、海外で生活することによって得られるトランスナショナルな意識はメディア表現活動にも影響を及ぼし、エスニックメディア研究を行う際の送り手研究としてはそうした意識へも射程を広げることの重要性も提示した。

グローバル化、デジタル化の進展はエスニックメディアをとりまく環境を劇的に変えつつある。メディアの受発信は国境を飛び越え、送り手に放送内容の対応も迫っている。寺岡伸悟は、インターネットによって、自然環境、社会環境に次ぐ第 3 の環境として情報環境がリアリティをもって立ち上がっていると指摘する（寺岡，2013: 229）。3ZZZ の場合も、国境を越えた番組作りやリスナーの広がりを見せており、地理的境界を越えた越境的な情報環境もまたコミュニティと言えるなか、番組制作・消費もグローバル化の様相を呈している。

3ZZZ では、2020 年のコロナ禍において、何人かのメンバーは番組作りから離れることになった。それでも、新しいメンバーを加えながらリモートで番組を作り、録音放送を毎週届けている（2021 年 1 月現在）。代表の中島みどりさんによると、松永一義・メルボルン総領事（当時）の Zoom を用いたインタビ

ューや日本に帰国するUさんがどのように出国・入国したのかを取り上げた回では Facebook のメルボルン在住者のグループに情報提供したこともあって多くのアクセスを得たという。このことは、海外で情報を届けるエスニックメディアの役割の大きさを感じさせるものであり、インターネットを活用することによってさらにリーチを獲得できることを示している。

コミュニティメディアの場合、何よりもボランティアで携わるメンバーたちのマンパワーが必要である。彼ら／彼女らを中心としたコミュニティ内外のコミュニケーションがますます活性化することを望みたい。同時に、メディア環境の変化にどう対応してコミュニティに有益な情報を届けるのか。エスニックコミュニティメディアの可能性をこれからも注視していきたい。

（謝辞）

本稿は、筆者が在外研究でメルボルンに訪れた時期（2019年4月～2020年3月）に何度も放送局に足を運んで番組を見学し、インタビューさせていただいた成果をまとめたものです。代表の中島みどりさんをはじめ、ご協力いただいたメンバーの皆様に心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

【注】

1　オーストラリアは、建国直後は白豪主義を採用して白人第一主義を標榜していたが、その後多文化社会へと移行し、現在では数多くの民族が流入して全人口約2500万人のうち30%近くが外国生まれとなっている（田中，2019：160）。日本人も例外ではなく、外務省の調べによると平成29年現在でオーストラリアに住む日本人は9万7000人で前年に比べて5%の増加で、アメリカ、中国に次ぐ3番目の多さとなっている。
日本からは英語を学ぶ留学生のほか、自由な雰囲気にあこがれてワーホリを選ぶ人々や国際結婚でオーストラリアに移り住む人が目立っている。

2　3ZZZでは、2020年3月下旬以降、スタジオを用いての生放送が不可能となり、2021年1月現在で日本語放送はすべて録音形式になるなどの影響を被ることになった。また、この放送局は永住者のほか、ワーキングホリデーを利用した若者や留学生によって運営されているため、こうした変化で日本に帰国せざるを得なくなってしまったメンバーもいて大変な不自由を強いられるなかでの番組作りになってしまったという（2020年12月28日、3ZZZ代表・中島みどりさんのインタビューより）。

3　日本コミュニティ放送協会のまとめによると、2020年11月現在、全国のコミュニティ放送局は331局となっている（日本コミュニティ放送協会HP, https://www.jcba.jp/index.html, 2021年1月6日アクセス）。日本にとってコミュニティ放送局の活動が活発化する契機とな

ったのは、1992 年の放送法の施行規則改正である。これによって、市町村単位の FM ラジオ放送（コミュニティ放送）が可能になった。とりわけ、1995 年の阪神・淡路大震災での「FM わぃわぃ」の放送で有効性が注目を集め、各地で開局が相次いだ。さらには、出力も 1 ワットから 20 ワットへと増強され、こうした放送局が定着することになった（松浦・川島，2010: 5）。

参考文献

浅岡隆裕，2006,「道具としての地域メディア：メディア・アクティビズムへ」丸田一・國領二郎・公文俊平編著『地域情報化　認識と設計』NTT 出版:232-249.

Basch, L., Glick Shiller, N & Blanc, C. S. ,1994, *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments and Deteritorialized Nation States*, Gordon and Breach.

Buckley, S., 2010,「世界のコミュニティラジオ　第 1 節」松浦さと子・川島隆編著『コミュニティメディアの未来：新しい声を伝える経路』晃洋書房：29-33.

藤田結子，2007,「国境を越えるメディアとナショナル・アイデンティティ：米国と英国における日本人の若者の民族誌的調査から」『マス・コミュニケーション研究』第 70 号：97-115.

深澤弘樹，2020,「メルボルンにおける日本語放送の現在 ： 送り手聞き取り調査から」『駒澤社会学研究』第 54 号：1-30.

濱野健，2014,『日本人女性の国際結婚と海外移住：多文化社会オーストラリアの変容する日系コミュニティ』明石書店.

平塚千尋，2011,「ケーブルテレビと市民参加の地平～日本」金山勉・津田正夫編『ネット時代のパブリックアクセス』世界思想社：142-157.

岩渕功一，2009,「グローバル化とメディア文化再考」『放送メディア研究』第 6 号：7-32.

———，2011,「多文化社会のメディア：文化シティズンシップの実践に向けて」『マス・コミュニケーション研究』第 79 号：5-25.

———，2016,「遠隔地多文化主義：オーストラリアの日系移民と＜いまここ＞に根付いたトランスナショナリズム」長友淳編『オーストラリアの日本人』法律文化社：204-214.

北郷裕美，2015,『コミュニティ FM の可能性：公共性・地域・コミュニケーション』青弓社.

Maclver, R. M., 1917=1975, *Community A Sociological Study: Being an Attempt to Set Out the Nature and Foundamental Laws of Social Life*, Macmillan and Co., Limited, 中久郎・松本通晴監訳『コミュニティ』ミネルヴァ書房.

Matsaganis, M., Kats, V.S. and S.J. Ball-Rokeach, 2011, *Understanding Ethnic Media: Producers, Consumers and society*, London: Sage.

松原明，2011,「アクティビズムのこれまでとこれから」金山勉・津田正夫編『ネット時代のパブリックアクセス』世界思想社：55-67.

松本恭幸，2009,『市民メディアの挑戦』リベルタ出版.

松浦さと子・川島隆，2010,「いま、コミュニティメディアの必要性を問う」松浦さと子・川島隆編著『コミュニティメディアの未来：新しい声を伝える経路』晃洋書房：1-12.

宮崎寿子，1998,「パブリック・アクセスからみたメディアの現在と未来」児島和人・宮崎寿子編著『表現する市民たち』日本放送出版協会：215-249.

毛利嘉孝，2017,「インターネットとトランスナショナリズム」伊藤守ほか編『コミュニティ事典』春風社：312-313.

白水繁彦（編著），1996,『エスニック・メディア：多文化社会日本をめざして』明石書店.
————，2004,『エスニック・メディア研究：越境・多文化・アイデンティティ』明石書店.
————，2016,「エスニック・メディアの社会学的研究：ハワイ日系新聞最盛期の新聞人の事例」『駒澤大学ジャーナリズム・政策研究所　年報』第 35 号：85-109.
田中豊裕，2019,『異文化理解とオーストラリアの多文化主義』大学教育出版.
寺田征也，2017,「放送局の担い手の誕生」『日本のコミュニティ放送：理想と現実の間で』晃洋書房：84-93.
寺岡慎悟「メディアが『地域』を創る時代」遠藤英樹・松本健太郎・江藤茂博編著『メディア文化論』ナカニシヤ出版：215-231.
Zangalis, G., 2014, *From 3ZZ to 3ZZZ: Short History of Ethnic Broadcasting in Australia second edition*, Ethnic Public Broadcasting Association of Victoria Limited.